

季刊わたぼうし

NO. 82
'09秋

シリーズ
本田 雄志さんと語る IV

今回の目次

※シリーズ・本田雄志さんと語るIV 2

出席者

- ・本田 雄志 (ほんだ たけし) 氏
- ・西村 正悦 (にしむら まさよし) 氏
- ・川崎 節子 (かわさき せつこ) 氏
- ・嶋田 三穂 (しまだ みほ) 氏
- ・桶屋 善一 (おけや ぜんいち)

※脳性麻痺の2次障がいを乗り越え、

地域で「ペン画展」を開催して

・天井 章氏 10

※みんなの広場

・「食べ物談話」「食べ物って何だろう？」

と考えたことある? 秋本 信子 12

※連載企画予告

・「富山ライトレール」で行く

富山市岩瀬浜散策 15

※マイ・ブックスルーム

・ドラゴンとしんのすけ 16

地球儀の裏へ
走って来たニュース
宮田 比呂雪



この機関紙は障がいのある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

シリーズ 本田 雄志さんと語る IV

～郵便屋さんが障がい者福祉の世界へ～

【目 的】

全く福祉の世界に関係のなかった人が、郵便局を定年まで2年あまり残して退職し、精神障がい者の世界へ飛び込んだ男性の人生を紹介する。

【開催までの経緯】

本田さんと出会ったのは、2年前に地域活動支援センター「ワークショップ野の花」の利用者・職員の方が「青山彩光苑」へ出前喫茶に毎月一回来られたことがきっかけです。その後、本田さんを紹介され交流が始まりました。

2006年10月から七尾駅前第二地区市街地再開発ビル「ミナ・クル」のバリアフリー体験に参加させていただき、七尾市長との懇談会など、いろいろと交流させていただきました。

先日、ある食事会で本田さんの歩んで来られた話を聞かせていただき、皆さんに紹介したいと思いこの企画をしました。

【語る内容】

- ・何が郵便局を退職して障がい者福祉の世界へ飛び込むきっかけになったか？
- ・精神障がいの方々と出会って苦勞すること、楽しかったこと。
- ・障がい者自立支援法になってから、利用者の方々の負担は多くなったと思いますが、生活にどのような影響がありますか？

【日 時】 2008年 5 月17日(土)11時～

【場 所】 「麺の華」(七尾市生駒町)

【出席者】

★特定非営利活動法人「野の花」理事長
NPO法人野の花

地域活動支援センター「ゆうの丘」施設長

本田 雄志氏 (ほんだ たけし)

★「青山彩光苑」職員

西村 正悦氏(にしむら まさよし)

★「身体障害者ホームセレーナ青山」在住

川崎 節子氏(かわさき せつこ)

★「HSK季刊わたぼうし」読者

嶋田 三穂氏(しまだ みほ)

★「HSK季刊わたぼうし」編集委員

桶屋 善一(おけや ぜんいち)

【企画・主催】

「HSK季刊わたぼうし」編集委員会



地域活動支援センターI型「ゆうの丘」の概要

1. 設置場所

七尾市矢田町ミ81番地2

(旧七尾商業高等学校同窓会館)

2. 運営主体

特定非営利活動法人 野の花

(理事長・本田 雄志)

3. 施設の概要

平成19年度自立支援基盤事業により、旧七尾商業高等学校同窓会館を改修したもの。

地域活動支援センター「ワークショップ 野の花」(精神) 及び「ハウスにここ」(知的) が合併し、平成20年4月1日開設。(平成20年4月21日事業開始)

- ・構造：鉄筋コンクリート3階建て。
- ・整備内容：障がい者トイレの設置、階段手摺の設置、スロープの設置などの施設のバリアフリー化、生産活動(アルミ缶プレス)のプレハブハウス設置など。

4. 活動目的

地域に生活する障がい者が、活動を通して自分らしい生き方を見つけるために集う活動

の場です。就労を目指し軽作業を行ったり、仲間と過ごすことで楽しみを見つけたり、地域で過ごすために必要なことを身につけたり等、個々の目的に応じて支援を行っています。

また、当事者を支える家族等の支援や相談、そして地域に出向くことにより地域住民の理解や交流につなげ、障がい者の社会参加を目指します。

5. 活動内容

(1) 生産活動

- ・内職作業(菓子箱折り、ハーネス等)
- ・自主製品(クッキー、パウンドケーキ製造販売、小物等)
- ・アルミ缶回収プレス
- ・清掃作業(公園、庭園等)
- ・出前喫茶(障がい者施設)等

(2) 創作活動

手話・絵画・太鼓・調理各教室
「ふれあい農園」等

(3) ボランティア活動

- ・高齢者施設、障がい者施設、地域(町内・公民館)の清掃活動



作業室2



作業室1



休憩室



食堂



相談室



作業室3



ゆうの丘建物全体



アルミ缶作業小屋

本田雄志氏と語るⅣ ～郵便屋さんが障がい者福祉の世界へ～



桶屋・西村氏・川崎氏・本田氏

前号からの続き↓

Q. 精神障がい者の人たちと出会って、苦勞すること、楽しかったことを語って下さい。

本田：精神障がいの方たちをなかなか理解できないことでものすごく悩みました。「やろうやろう。何とかしてあげよう」という気持ちが先行して、何も出来ない自分がいました。それで空回りしていい自分がただ腹立たしかった。

嶋田：でも、それだけ悩むってすごいことですね。鬱病になるまで悩んだということですね。

本田：本当にご飯も食べられないようになって。職員もお陰様で「本田さん、食べないとだめ」と言ってくれました。職員は20代、30代、40代。女の人3人います。一度ボランティアに来てくれた人に、すぐ次の日に電話して「職員が足りないのよ」と言って、来てもらって。

嶋田：「ゆうの丘」の利用者は何人いますか？

本田：30～40人です。

嶋田：職員は何人ですか？

本田：職員は私を含めて6人です。

川崎：その他に、ボランティアのおばちゃん二人手伝ってくれています。青山彩光苑の「野の花喫茶(月に一度、ゆうの丘の利用者、職員が青山彩光苑を訪問して開く喫茶)」の時に来ています。

嶋田：「野の花」の商品をアルプラザで時々買います。「野の花」という名前だけは商品で知っていたから。

本田：「ゆうの丘」という施設名になりましたが、その前の「野の花」の時は仕事を始まるときと終わりにやるのが一つあるのです。呼吸法をやらせているのです。背筋を伸ばしたり。

川崎：それに声を出せばいいのですよ。

本田：それでまず「呼吸法」をやらせて、鼻から吸うって鼻から出すヨガによく似た呼吸法です。そうすると自律神経を整えることが出来ます。吸うた時よりも吐く息を3倍の時間をかけて出す。

嶋田：ゆっくり出すわけ。

本田：やっぱり、声を知的の方が出します。それもその時間だけ黙っています。

嶋田：善ちゃんも明日からすれば。呼吸法を。

本田：そして背筋を伸ばしていない人、そんな人は……。

川崎：私らは呼吸が浅いからよく言われました。腹式呼吸にして、なおかつ声を出さないといけないようです。私らは肺が弱いから、胸も曲がってきます。だんだん年とともに。

本田：何億という肺に肺胞があります。酸素をためておくものです。呼吸法が腹式呼吸でないと、浅い呼吸だと肺胞の中に新しい酸素が入っていかない。その予防にもなるのです。

川崎：それで肺炎を起こしやすいようです。

本田：その予防にもなります。私は精神センターへ2週間に一度ボランティアに行って、ウォーキングを教えているのです。もう7年目に入っています。歩いた後ストレッチ、歩く前にストレッチと繰り返し、筋肉トレーニングを100回やって。後は声を出すようにしています。「天突き運動」といって、動作はスクワットでかけ声は「ヨイショ」と全員で腹から大きな声を出します。精神の方だからどうしても大きい声を出す人もいます。病院の体育館で多いとき、30～40人来ます。入院の方も来るし、デイケアのボランティアに行っているのですが、婦長さんや看護師さんも一緒にやります。

川崎：いつも「声を出せ」とよく言われて。



本田：川崎さんが言われたように、私は確かに声が大きい。私は高校生のソフトボールを教えていました。そのときグラウンドの端から端まで二組に分かれて、名前と何年生の誰々と声、こっちから50メートル離れて声を出します。聞こえたらみんなで○、聞こえなかったら×声を出す練習。声はやっぱり腹から必ず出さないと。のどからだ絶対届かない。

川崎：私たちは年齢とともに、声も小さくなるからね。だから「呼吸をしながら声を出しなさい」と言われました。

本田：言うとおりでですね。

川崎：実は学校時代、詩吟を習っていたんです。

嶋田：詩吟をやっていたの？

本田：あれは腹から出さないと出ないね。

川崎：1年か2年は続けて大会などに出るのです。小松でね。

嶋田：そうなの。

川崎：私たちの担任の先生が……。 (笑)

Q，障がい者自立支援法になってから、利用者の方々の負担は多くなったと思いますが、生活にどのような影響がありますか？

本田：今のところ、地域活動支援センターの利用料については七尾市は取らないことになっています。それは「取るなら取っても良いけれど、七尾市はきちんとやりなさい」と言

いましたので「利用料は取りません」ということに昨年からなっています。

これも県内でばらつきがあるのです。加賀市は地域活動支援センターの利用料を取っているのです。金沢市も来年度は取ることになっています。ちょっと各施設に対して脅しをかけています。七尾市に対してはもしそんなことを言ったら、私は戦いますよ。絶対に聞きませんか。「あなたがたでやりなさい」と徹底的にやりますよ。

本当に誰のための政治かということを、根本を突き止めていかなければ。



公園や個人宅の草刈りを行っています。

本田：あんまりひどい金額は取っていないと思いますけれど、ただ工賃の半分以上は取られていると思います。私の所の工賃は1万5～6千円ですね。私もクッキーを売りに旅館などに営業に行きます。今、能登島の美術館ではガラスとセットで売ってくれている。

それから、私立と公立の保育園の園長会議に行ったときに、「ゆうの丘」の説明会を開かせていただきました。

嶋田：「あおぞら」もまだ日が浅いけれど、私も孫の祝いとかに「あおぞら」のケーキやクッキーをセットにして配りました。道の駅や農協などのお店にも売っています。

本田：クッキーを今日、持って来たのですが、どうぞ食べて下さい。



川崎：おいしいよ。

嶋田：私も買ったことがあります。

本田：これは地産地消で中島菜が入っています。

嶋田：有名な中島菜ですね。血压に良いよ。

本田：これ、5個持って来たので。

嶋田：私、中島菜が入っているのを買っていきます。

本田：250円です。

嶋田：羽咋でこの量で250円は売れないでしょう。

本田：私たちは添加物を入れていないので、あんまり保存は利かないのです。

嶋田：「あおぞら」もそうなのです。「あおぞら」の施設長は本当に立派な人です。すごく若いですけどYさんという人です。

善ちゃん、知っているやろう。可愛らしいし、細いし、若いけれど、本当に利用者にとってという視点が優先して、ずれなく徹底しています。それでしょっちゅう悩んでいることもあるけれど。養護学校の先生が「あおぞら」に見学に来られ「施設を廻ってくると空気が違う。みんながいる安心感・居場所になっている。いろいろ廻ってきているけれど違う。」と言うのを聞きました。(注1)

前ページの(注1)

現在はY施設長と一部の職員、利用者が「あおぞら」を出て新しい施設を立ち上げ頑張っています。

本田：あのね。「野の花」に看護学校の生徒が実習に来たのです。精神の方に実習生が来たら必ず「自分が『野の花』に来たことを、絶対誰か一人に言って下さい。お願いします。」8人来たら16人になる。「野の花」の存在、精神の障がい者の施設ですよ。家族でも良いし、誰でも。妹でも、お兄さん、お姉さんでも誰でも良いから、誰かに言って下さい。と言ってるのです。そうすると倍に増える。口コミで。宣伝するお金もないし。そして必ずコメントを書いて下さいとお願いをします。「精神障がい者についてどのように感じていますか、正直に書いて下さい。その代わり名前も公表しますが良いですか？」と了解をもらって、私が何か会議があったときか、ちょっと話に来てくれというときに持って行きます。

私が言うより、私は施設の人間だから施設を良いように言います。だけど「施設を来た人がこう見て思ったことを書いていただく、これを見て下さい。」その方が真実で訴えられる。

それでやっぱり「野の花」へ来られた方は、意外と帰るときに「良い感じやね」と言われます。やっぱり精神はイメージがものすごく悪いね。

川崎：そうそう。

嶋田：まだまだ理解が足りないね。

本田：ところが「こんな所でしたのね。」と

必ず良い形に答えが返って来ます。



クロネコヤマトのメール便の仕分け作業

嶋田：友だちのKさんから聞いた話ですが「N病院が『ベテルの家(北海道にある精神障がい者の施設)』の方を呼んで講演されたことがあります。そのときに『こんなに違うのや』って思った。ここにも病院に入院されている患者さんがいて『ベテルの家』から来られた方も精神障がいと同じでしょう。

なのに『ベテルの家』の人は自分のことを、こんな病気なのです。障がいなのです。ということ自分でアピールして明るくやっておいでる。この違いは何なのだろう。やっぱり周りの人の支援の仕方、関わりだと思います。」と語っていました。羽咋でもありました。ある精神障がいの女の子が「自分が精神障がい」と言ってパネラーになったときに、支援する会のある人が「あら、あの子自分が精神障がい」と言って、非難したのです。まだまだ身近な人でも「精神」は「知的」以上に偏見があるから。

本田：私はT病院のカードを持っています。T病院は老人の痴呆と精神しかない。T病院の家族会の会合があったときに、まず「私これなのです。水戸黄門ではないですけど、みんな同じですよ。」というのです。そうするとみんなが安心するのです。

嶋田：ピアカンのようなものですね。

本田：これは必ず大事なものです。

嶋田：安心しますね。

本田：そうそう。全然、部外者かな？と思われなく、みんな同じ。私も5年間病院へ行っていないのでわからなかったけれど、糖尿病でした。空腹時で血糖値が320ありました。わからなかったのです。それでしんどかったのだと思います。

川崎：危ないね。

本田：それで今は薬を飲んでいます。利用者から「本田さん、薬を飲んでいるの？」「一緒にやみんなと。」というみんなが安心します。



菓子箱折り作業を行っています。

嶋田：皆さんが「どう関わって良いかわからない。」と言われます。

本田：精神障がい者の人たちとの関わりはみんながわからないのです。関わろうとすると無理がくるのです。無理という字は「理論が無い」と書きますね。だからごく自然にという方が良く私は思います。

嶋田：だから「あおぞら」へ来るボランティアさんは、知的の方たちと交流していると

「安らぐ」と言います。知的の場合はみんなが安らぐという良い面があります。交流をしても損得やあの人が悪いとか良いとか比べないし、本音で語れます。

本田：精神障がい者の人たちは、私が元気じゃないとだめなのです。私が具合が悪くなると「おれのせいや」と言って自分を責めるのです。だから常に元気そうにしていなければいけないのです。

嶋田：それにつらいね。

本田：利用者の中には、一度家に帰って、野の花に戻って来るがあります。「所長、帰るとき、ちょっと機嫌が悪い顔をしていたが俺を怒っているのかと思って、心配でまた戻ってきた」ということがあります。細心の注意を払わないといけない部分もあるけれど、やっぱりそこに教えられることは常に素直にないとだめだということです。そうすればみんなが安心します。

だから私が元気がないと、利用者も元気がなくなります。それだけ通じているということです。私は川崎さん、桶屋さんたちと出会って、K病院のK先生が青山彩光苑の理事長ですが、その先生が精神障がい者の人たちが青山彩光苑で喫茶をすることを返事してくれたのです。それを仲を取り持ってくれたのは西村さんです。

精神障がい者の人たちがボランティアを兼ねて自分たちのクッキーを売ったり、川崎さん、桶屋さんたちとこういう出会いがあって、お互いに障がいを持ちながら、そういうハンディを持っている人間同志の出会い、ふれあいがあって、本当にお互いに頑張ろうという気持ちになってくれるかな、と思っています。

私は施設の中の活動なんて、家から来てまた施設の中に入っていたら、病院にいることと同じことになります。それよりも「施設から社会参加」とよく言っているけれど、社会参加させていないのが今の障がい者の施設なんや。

桶屋・川崎：そうや。

本田：違いますか？ 私はそんなことは大嫌いです。外へ一歩出す。それが社会参加。その第一歩ですよ。

川崎：私たちも閉じこもってばかりいたらだめなのです。

本田：雨が降っていても、川崎さんは青山彩光苑から電動車いすで外出して来る。

嶋田：川崎さんは青山彩光苑から電動車いすで来たので、ビックリ。桶屋さんはバスで来たのに。川崎さんはどうしてくるの？と言っていたのです。

本田：川崎さんは青山彩光苑の坂を上って来るね。

川崎：やっぱり行きたい所は、どうしても行かなければならないから、雨が降ろうが風があろうが、何としてもいかなければいけない。(笑)

本田：先日も七尾鹿島のボランティア連絡協議会で二人が講師で、川崎さんは雨でベシヤ、ベシヤになってきました。

どうしたの？って聞いたら……

川崎：ちょっと、道間違えたら雨に降られてベシヨベシヨになりました。(笑)

本田：根性やわい。

桶屋：これで本田さんを囲んでの対談を終わります。参加された皆さん、長い時間ありがとうございました。今後、七尾市をはじめ各地の障がい者福祉が発展するよう本田さんのご活躍をお祈りします。

これで対談の終了

対談を終えて

4回に渡って掲載しました「本田雄志さんと語る」を今回で終了させていただきます。対談を行なった昨年5月とは「ゆうの丘」の状況も変わり、今年10月から就労継続支援B型へ移行予定です。

現在、本田さんは施設体系移行のための準備、申請手続きのために各機関に飛び回ってお忙しい毎日を過ごしておられます。今後の活躍をお祈りします。(編集者)



七尾市福祉まつりで「ゆうの丘」の利用者、職員による手話コーラスを披露。2009. 9. 6

脳性麻痺の2次障がい乗り越え、地域で「ペン画展」を開催して

七尾市出身・天井 章氏



【テーマ】

「脳性麻痺(CP)の2次障がい(頸、体の痛み・手術)を乗り越え、地域でペン画個展を開催」

【企画の経緯】

天井章(あまい あきら)さんは昭和18年に七尾市内で誕生、現在は66才。

幼い頃から脳性麻痺の障がいを持ちながらも、地域の学校を卒業し、七尾市内の職場で働いていました。定年に近くなってから体の自由が利かなくなかったので、身体障害者療護施設「青山彩光苑」へ入所しました。入所直後から脳性麻痺の2次障がい(脳性麻痺の人はもともと体の障がいに加えて、加齢とともに体の硬直・不随運動によって椎間板の痛みからなる「頸椎症(けいついしょう)」という頸の病気)のため、頸や腕の痛みがひどくなり、市内の病院で手術を行いました。

頸の手術後、病院を退院して施設に戻り、体調が回復してからは作業療法士にリハビリを兼ねて絵を描くことを勧められ、カラーサインペンを使ってスケッチブックに描き始めました。作品がたまってきた昨年の春頃から

個展を開きたいという希望がわき、1年近く作業療法士と個展の準備を重ね、今年の2月に天井さんが幼い頃から生活してきた七尾市一本杉通り商店街の画廊で、北國新聞社の後援で1ヶ月近く開けられました。

個展が「北國新聞」に紹介されたことにより、幼なじみとの再会や、施設への訪問など数々の友人との出会いがありました。

夜も寝られない程の頸や腕の痛みと闘いながら、作品を描き、個展の準備をされている天井さんの姿を見るにつけ、同じ脳性麻痺(CP)の2次障がいの痛みや悩みと闘っている方々への励ましとなればと思い、お話を伺う企画をさせていただきました。



―手術前のMRI検査―

Q.1「脳性麻痺(CP)の2次障がい」による頸及び体の痛みとの戦いについてお話し下さい。

私が仕事を辞めてからは、徐々に足が動かなくなってきて恐ろしかったです。それから1年程は肩甲骨が痛くておられなくなりました。あまり痛くてどうしようもないので「青山彩光苑」に入所しました。「彩光苑」に来てからK病院に行きました。そしたら先生から頸の手術を勧められました。金沢の病院も勧められて同級生に相談をしたら、N病院を勧められましたので行きました。

N病院で「脳性麻痺(CP)の2次障がい」

と診断されました。どのようにして頸の手術をしたのかと言いますと、体の中のばい菌を殺すために点滴を24時間していました。いよいよ手術室に入るとステンレスでピカピカな手術場が3つぐらい並んでいました。そして麻酔の注射をしたら意識がわからなくなりました。

麻酔から覚めたら、血液を固まらせないために足に靴下をはかせられて、足の先を一晩中刺激するのです。これをせずに寝てしまったら脳に血液が詰まり脳梗塞になるのです。それで寝られないのでひどい思いをしました。足を刺激するので寝られなくなりました。時期が夏、頸に装具をはめられ、プラスチックの堅いものなのでとてもひどい思いをしました。

いよいよ堅い装具を外して柔らかい装具に変えました。そして「青山彩光苑」に戻って来ましたが、今もこの頸の痛みはものすごくひどいものです。この手で電動車いすのスイッチを入れているけれど。以前は手が自由に動いて電動車いすで高い山の頂上まで行ったり、転んだりしていました。そのときは元気で恐ろしくありませんでした。しかし、現在は手が痛くていられません。夜も我慢できない程痛みがひどいです。



作品制作に励む天井氏

Q.2 なぜ、絵を描き始めたのですか？

絵との出会いですが、最初、作業療法士さんが見守って利用者が絵を描いていたので、

作業療法士さんが横にいて私も時計の絵を描く利用者を見ていました。それを見ていて「利用者さんの絵はダリ(画家)みたいな絵ですね」と言っていました。

そしたら、作業療法士さんが「天井さんも絵を描いてみれば、どんな絵でも良いよ。」と言われました。こんな絵ならどんなものでも描けると思って描きました。最初は島の絵を描きました。そしたら、「研究発表の資料の表紙画があるので」と言われ、表紙になりました。これが一番最初に描いた絵です。次にカラーペンで色を塗ったりして、イタリアの塔などを描きました。



利用者の方が個展鑑賞に出かける

絵の題材は適当に周囲にある本から選んでいました。イルカと岸壁の絵は弟がよく鹿渡島へ行くので、想像で描きました。本当に景色を見て描いた絵ではないのです。フランスの「モンサンミ歇尔」「アルハンブラ宮殿」は観光パンフレットを見て描いています。

「竹の子」の絵は職員の方が大きい本を持って来て見ていました。そこに「竹藪」の絵が出ていたのです。別に「竹藪」を見て描いたのではなく、私が作って描いたのです。その「竹の子」の絵を見られた方が「紅竹を描いて欲しい」と言われたのです。私は紅竹を見たこともないのに「描いて欲しい」と言われたので描きました。

Q.3 個展を開くきっかけ、なぜ、七尾市一本杉町「ミニギャラリー玉藻」で個展を開くようになったのですか？

ある日、作業療法士さんが描いた絵がたまってきたので、最初は銀行に展示する機会がありました。そのときに銀行にも飾ったりしていました。これは個展でなく展示だけでしょ。他の人の絵もありました。

作業療法士さんが「天井さん、どこかに個展を開く場所を知りませんか？」と聞かれました。それで七尾市一本杉町の「しら井昆布店」さんを紹介しましたら、すぐに電話をしたのです。まさか自分の個展だとは思っていませんでした。

だいたい、見に来る人がいるとは思っていませんでした。最初は12月に予定していましたが、手違いで2月になりました。個展は北國新聞社の後援になり、玄関の立派な看板には職員の方もびっくりしていました。個展などはなかなか開けないし「良かったね」と言うけれど。個展を開くとなると、額縁はいるし、画用紙に描いた絵だけを飾るわけにいかないし。

「ミニギャラリー玉藻」の正面にあるウィンドウは大きいので、大きい額縁が要ります。それで店に額縁を見に行きました。

最後に、この個展を開催させていただき、懐かしい友人たち、同級生に出会えたことに大変喜んでます。

また、ここまでご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

天井章「わが心の旅路展」

2009年2月1日から27日まで七尾市一本杉町「ミニギャラリー玉藻」(しら井昆布店内)にて、青山彩光苑の利用者である天井章氏の個展を開催しました。「わが心の旅路」展と題



青山彩光苑正面玄関でミニ作品展

して、天井氏が日頃より描き連ねた十数点のペン画を展示しました。原色で明るいペン画はギャラリー内にライトアップされ、まさに幻想的な雰囲気をかもし出していました。

2月9日にはアートクラブのメンバーで鑑賞して来ました。メンバーの一員である天井氏が、このような素晴らしい個展を開催できたことを誇りに思うと同時に、次は是非自分が個展を開きたいと今後の活動に意欲を見せるメンバーもいました。

(青山彩光苑ホームページより)



(2009年2月2日付「北國新聞」)

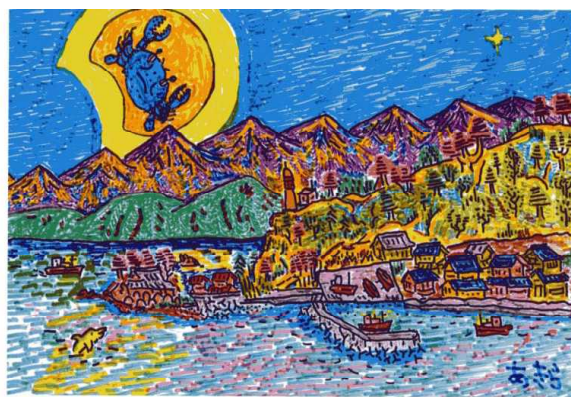
天井章氏作品集



イタリアの街



アルハンブラ宮殿



鹿渡島



竹の子、筍

※この絵画は天井さんの転載許可をいただいて掲載しています。

みんなの広場

= 読者企画・食べ物談話 =

「食べ物って何だろう？」と考えたことある？

管理栄養士・秋本 信子

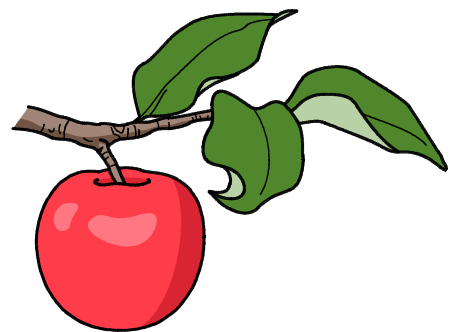
『リンゴの実は落ちるのに、月はなぜ落ちてこないのか』という本があります。このことを最初に考えのが、庭のリンゴの木から実が落ちるのを見て万有引力を発見したニュートンということになっています。

「何でそんなことが不思議なの？あたりまえじゃん」と言ってしまう身も蓋もないけど、「あれっ、何でだろ？」と立ち止まって考えてみれば、たしかに不思議なテーマだなあと思う。答えは、「月は地球に落ち続けている」のが正解だそうだけど、一向に月が地球に落ちてくる気配なんてないよね。それは、地球が丸いことと自転のスピードにあるらしい。月は地球の重力にひっぱられ続けながら、三日月や満月など、毎日姿を変えて美しく夜空に浮かんでくれている。あたりまえのことだけど、ありがたいことだなあとも月を見ると、また違った顔を見せてくれますよ。

おっと、横道にそれてしまったけど、「食べ物って何だろう？」と考えたことありますか？「一応食べ物の専門家が何言ってるの」と煙たがられそうだけど、私はずっと不思議でなりません。「なぜ食べるのか？」「何のために食べるのか？」「どのようなものを食べているのか？」と食べ物に関心を持つと、原形をとどめないように調理された食材に対して、「食べ物となった牛や野菜などの命を頂いている」ことへの感謝の気持ちが遠のいていくように感じてしまうのです。

それでも、高齢になったり、さまざまな状況によって食べ物をスムーズに飲み込めない方が増えています。その時は、いったん調理した食べ物を細かく刻んだり、ミキサーでどろどろにしたり、お茶など“とろみ剤”で飲み込みやすくしたりします。必要なことだけど、“食べる楽しみを味わってほしい”と心を込めて作った料理を、いったんお皿に盛ってから刻んだりするのは、本心悲しくなることがありました。すでに現場を離れているから言えることですけどね。それでも、心をこめて、食べてほしくて、清潔に心がけながら刻むのです。

看護師さんや介護福祉士さんは、「口から食べることが人間として大切なんです」とおっしゃいます。その通りだと私も思います。ただ、「食べ物」って、すべて生きていた命をいただくのです。「食べ物」って、「命のかたまり」なんですよね。あたりまえのことなだけで、ふっとそんなことにも思いをはせてほしくて書きました。



次号からの連載企画予告 「富山ライトレール」で行く「富山市岩瀬浜」散策



ライトレール始発駅・富山駅北

【企画の経緯】

今までの「HSK季刊わたぼうし」は他の団体が企画した講演会、学習会のテープ起こしなどを利用して掲載していたことが多かったのですが、今回は自らが企画・実施し、報告してみようと思いました。

今回は以前「自立生活支援センター富山」において10日間の自立生活体験を行った時に、新しく富山市内に走った「ライトレール」に乗ってみて、ライトレールの紹介を兼ねて、駅周辺のバリアフリー状況、観光地としての自然の紹介、おいしい飲食店のメニュー、車いす利用者が気軽に利用できる飲食店の紹介をやってみたいと思い「自立生活支援センター富山」と友人の協力をお願いして取材を行いました。

次号から富山駅編・ライトレール編・観光地編を数回に分けて報告します。

【目的】

①「HSK季刊わたぼうし」は外から情報が入ってくるのを待っている記事多いので、自ら出かけて体験を行い、レポート報告をする。

② J R 富山駅から「富山ライトレール」の富山駅北までの移動手段のレポート報告。終着駅の岩瀬浜の観光地散策、歴史散歩、車いすですぐ利用可能な飲食店のレポート報告。

【富山ライトレールとは？】

愛称・ポートラム。2006年4月29日開業。地域に密着した安全・安心・快適で環境にやさしい公共交通。

バリアフリーの低床車両を導入。車いすやベビーカーでも楽に乗り降りできます。

路面電車は道路混雑緩和や交通事故の削減、二酸化炭素や窒素化合物の削減などに効果がある環境にやさしい乗り物です。（HPより）

【取材(1)の日程】 2008年5月15日（金）

【取材協力】 「自立生活支援センター富山」

職員2名、介助者1名

【取材(2)の日程】 7月7日（火）

友人と富山駅周辺の写真撮影。



岩瀬浜海岸の港



岩瀬浜の老舗料亭「松月」

マイ・ブックスルーム

ドラゴンとしんのすけ

テレビ金沢 編

本体：¥1,333+税 発行：株式会社ワニブックス

この本は日本テレビ系列で放送されたNNNドキュメント「ドラゴンとしんのすけ」をもとに追加取材をしてまとめたものです。

自閉症の伸乃介君への母親の愛情と厳しさが綴られており、涙なしでは読めない感動の一冊です。絵本も同社より発売中。

新表紙水墨画筆者紹介

三室 千鶴子〔みむろ ちづこ〕氏

交通事故で障がい者になって施設で自分の好きなことが出来る時間がいっぱいある。

時間は好きなことをするように私に与えてくれたと思っている。水墨画教室に入って本格的に描き始める。暇になってくると川柳・詩などを書いています。

命有る者は老生、老病、死は避けられないから。

年間協力会員募集中

この機関紙は障がいのある人、ない人がそれぞれの考えを出し合う中から、互いに理解を深め、共に生きる豊かな社会づくりを目的として、有志により発行しています。

つきましては、主旨に賛同して協力会員になっていただく方々を募集しています。

この会費で、在宅障がい者や福祉関係機関等に送付していますので、機関紙一部の料金ではなく、年間協力会費として扱っています。

年間協力会費：2,000円

会費振込先：郵便振替口座

振込先名義：わたぼうし連絡会

00750-6-9791

編集後記

今年の夏は冷夏で、昨年の暑さに比べてとても過ごしやすかったと思いますが、農家の皆さんにとっては農作物の管理が大変だったと思います。

さて、報道に目を向けると衆議院選挙は民主党の勝利で新政権が誕生。新型インフルエンザも流行し始めて来ていますが、秋の楽しい催し等に影響が出ないことを願っております。(Z.O)

川柳裏表紙

地球儀の裏へ 走って来たニュース

これはたしか「早い」という題で作った句だったと思う。

「地球」は丸い。丸い地球上にいろいろな国があります。その国々の色を変えて国名を書き入れ、北極と南極を軸にしてクルクル廻せるようになっているのが地球儀である。地球儀には時差がありますネ。日本が昼間だったらその裏側の国々は夜だ。事件、事故は夜、昼絶え間なく発生しているね。通信の発達している現在、地球上に起きた大事件などのニュースは、またたく間に全世界に伝わる。テレビなどの報道局はまさに「早さ」との勝負だ。(比)

編集及び連絡先

「HSK季刊わたぼうし」ホームページ

<http://jiritsusien.com/>

メール：zen@san9.net

定価二〇〇円

沼田さんへ

いつも、お世話になっております。

「HSK季刊わたぼうし」の印刷、発送をお願いします。

印刷は370部、私に50部、後は羽咋へ送っていただけないでしょうか。

〒926-0831 七尾市青山町ろ部22番

青山彩光苑・桶屋 善一

- ・地球儀の裏へ走って来たニュース 114p
- ・公約の賞味期限はすぐに来る 115p
- ・底辺のくらしラーメン店が混み 69p